

伊豆市の観光資源に隣接する園地有効活用に関する研究

静岡県立大学 国際関係学部 湖中ゼミ

指導教員：湖中真哉

参加学生：西海治将、南條淑、鈴木杏佳、福島菜々子

渡辺梓、成澤光希、片山範和

1 要約

本研究では、伊豆市からの指定課題「市内の観光資源に隣接した園地（旭滝、雄飛滝、瓜生野公園、湯舟川ふれあい公園、阿字苑など）の有効活用」に関して、伊豆市におけるフィールドワークを行うことによって取り組んだ。

本調査を令和元年11月、補充調査を12月に行った。本調査では伊豆市役所を訪れ、ゼミ内で考案した携帯電話などのデジタルデバイスを持たないデジタルデトックスツアーについて発表を行い、行政職員の方々と意見交換した。また園地管理者、レンタサイクルショップの方にもインタビューした。

調査合宿の中で得られた情報からデジタルデトックスツアーを通して、遠くの誰かとつながるネットワークではなく、今ここにある歴史や文化、現地の人々につながるネットワークが作られることが分かった。デジタル・デトックスツアーを伊豆市の観光資源の魅力に結びあわせることで、ツアーの参加者のニーズと観光資源の魅力を伝えたいという地元の方の思いの両方を叶えることができるのではないかと考える。そこで本研究チームは、実際に伊豆市を訪れる観光客を対象に、伊豆の自然や文化、歴史に身体で触れることで日常から開放され、「今ここ」につながる旅「デジタルデトックスツアー」を考案した。

12月の補充調査では、伊豆市産業振興協議会の方を対象に、調査を踏まえて考案したデジタルデトックスツアーを提案した。同協議会からは、ツアーの内容を全て決めるのではなく、お客様が自由に選べるオプションツアーにしていくのはどうかという意見を頂いた。そこで、伊豆市に来る観光客の観光へのニーズが多様だからこそ、様々な選択肢をもち、空き時間も楽しめるツアーを考察できないだろうかと考えた。

2 研究の目的

現在、伊豆市内には、旭滝、雄飛滝、瓜生野公園、湯舟川ふれあい公園、阿字苑など観光資源に隣接した園地がいくつかあるが、イベントなどで利用される機会も少なく、有効活用されていない状況である。そこで各園地の特色を活かし、地域住民、さらには観光客に向けた魅力的な活用方法を検討していくことが必要である。本研究では、伊豆市内の観光資源に隣接した園地の有効活用にあたって、学生目線で各園地における地域利用や観光客向けの活用について広く可能性を調査研究し、企画の検討をすることを目的とした。

3 研究の内容

上記の目的を踏まえつつ、伊豆市の観光動態、園地の利用状況などの情報を収集すると同時に観光のあり方についても考察した。現代においては携帯電話の普及に伴い、写真を撮ることに集中し、画面越しにしか物事を見ていないというケースが増加している。

そのようなテクノロジーに頼った生活は暮らしを豊かにする一方、観光の観点からは経済効果の偏り、視力の低下、コミュニケーションの希薄化につながると考えられる。そこで本研究チームは伊豆市の観光資源の自然や文化に接続することで、自分をいたわり、日常から開放される「デジタルデトックスツアー」を提案できないだろうか考えた。（デジタルデトックスとは一定期間スマートフォンなどのデジタルデバイスと距離を置くことでストレスを軽減し、人とのコミュニケーションや、自然とのつながりにフォーカスする取り組みである。デジタルデトックスツアーとはその要素を取り入れたツアーである。）



写真1. 伊豆市役所でのワークショップ

本研究チームは令和元年11月15日から17日にかけて、伊豆市において2泊3日の調査合宿を行った。15日には伊豆市役所においてゼミ内で考案したデジタルデトックスツアーについて発表するワークショップを開催し、行政職員の方から発表内容に対するフィードバックを頂いた。合宿最終日には、レンタサイクルを使って、伊豆市のレンタサイクルショップが推奨している3つのコースを回った。奥の院方面を回るコース、雄飛滝方面を回るコース、旭滝方面を回るコースに分かれて回り、各コースの見どころや注意地点を確認した。

伊豆市役所においてデジタルデトックスツアーについて報告するワークショップでは、検討項目としてツアーの対象者のニーズに合うようにデジタルデトックスの度合いを策定することの必要性があがった。ツアーにおいて、どれだけデジタルデバイスを使わないようにするか、どこまでの範囲で使用可能とするかを検討する必要があると考えられた。また、ツアーにおいて伊豆市の文学や歴史にアクセスするという視点を頂いた。伊豆市は修善寺を始め、興味深い歴史的背景をもち、また多くの文学作品の舞台になるなど文学にもゆかりがある。ツアーにおいて、伊豆市ならではの歴史性にアクセスすることで、ツアーの参加者に伊豆市の物語性を知ってもらえるのではと考えられた。

伊豆市のレンタサイクルショップの方へのインタビューでは、日常から離れ、「今ここ」にフォーカスするという視点を頂いた。その一つに「五感を通した自然体験をしてほしい」という意見があった。森林の中における皮膚感覚や滝の音など、実際に滝や川を訪れることで五感を通して自然を堪能することは、デジタルデトックスツアーの自然とのつながりにフォーカスをあてるという側面に適合すると考えられた。また「そこに立って感じるものはそれぞれ違う。身体で場所の魅力を感じてほしい」という話もあった。その例として奥の院までの道にある「いろは道」がある。それは昔、人が迷わないように道中の石碑にいろは歌の文字を順番に示しておいたというものである。これはまさにその当時の伊豆にアクセスする、歴史を感じとれるスポットだと考えられた。「ガイドブックを読むのもいいが、旅がガイドブックの確認になってしまうのはもったいない」とも語っていた。そこには参加者それぞれ見方は違うから、実際に行ってみて感じることを大切にしてほしいという思いがあった。



写真2. いろは道にある石碑

本調査最終日に各園地を自転車で回るテストツアーを行った。テストツアーでは、サイクリングを通して伊豆市の歴史、文化の魅力を発見した。土地の歴史、文化に触れることで場所の魅力を深く感じる事ができた。

12月11日に行った補充調査では、伊豆市産業振興協議会の方からツアー内容を全て決めるのではなく、お客様が自由に選択できるオプションツアーにしていくのはどうかという意見をいただいた。ここから伊豆市に来る観光客の観光へのニーズが多様だからこそ、様々な選択肢があり、空き時間も楽しめるツアーを考察できないだろうか考えた。

調査合宿の中で得られた情報や園地管理者の方の意見からデジタルデトックスツアーを通して、遠くの誰かとつながるネットワークではなく、今ここにある歴史や文化、現地の人々につながるネットワークが作られると考えた。そこで本研究チームは、実際に伊豆市を訪れる観光客を対象にして、伊豆市の自然や文化、歴史に身体で触れることで日常から開放され、「今ここ」につながる旅「デジタルデトックスツアー」を考案した。

4 研究の成果

(1) 当初の計画

当初は学生目線で考え、調査した情報を基にツアーの内容を実現可能にしていくことを計画していた。また、修善寺周辺の旭滝や雄飛滝、修善寺周辺のいくつかの滝を自動車で回るコースと阿字園や奥の院の日本文化を自転車で回るコースに別れて、提案するツアーのテストをすることを計画していた。

(2) 実際の内容(Aは予定通り、Bは一部修正、Cは中止など)

当初の計画にあったデジタル・デトックスツアーにおいて自動車で旭滝や雄飛滝などの水産資源を回るコースを、自転車で回るコースに変更し、旭滝を自転車で回るコースと雄飛滝を自転車で回るコースに変更した。

(B)

自動車で浄蓮の滝、芭蕉の滝、萬城の滝などの滝を回るツアーで事前に考えていたがツアー自体を自転車で回るツアーに変更したため、距離的な問題を考慮し中止した。(C)

レンタサイクルショップでのインタビューにおいて「今ここ」という、実際に場所に訪れ自分自身の感覚を大切にするという考え方を学んだ。そこで伊豆市役所で頂いた資料や地図、レンタサイクルショップで頂いた地図や既存のサイクリングコースをもとに自転車で回るコースを3方面に分け、テストツアーを行った。(B)

(3) 実績・成果と課題

デジタル・デトックスツアーの中身は自転車で回るものとして、アクティビティを盛り込みモデルツアーという形で三つのコースを考案した。



写真3. 奥の院へ続くコース

一つ目のコースはレンタサイクルショップで借りた自転車に乗り、奥の院に向かい、座禅体験をする。その後、阿字園の日本文化あふれる庭園の散策をする。そして、湯船川ふれあい公園、桂大師の散策をし、いろは道を通って修善寺方面に戻るというコースである。日本文化ならではの雰囲気を感じることができる趣のあるコースとなっている。

二つ目のコースは雄飛滝と益山寺に向かうコースである。このコースは滝に向かう途中で自転車を降り、益山寺に続く坂道を歩いて登るといったハイキング要素を取り入れたコースである。雄飛滝は道

沿いから階段を下った場所にあり、階段を降りる際には柵も簡易的であるため注意が必要である。自然に囲まれた場所を自転車で走るコースであり、非日常的な雰囲気を楽しむことができる。

三つ目のコースは旭滝に向かうコースである。途中、金龍院、竜泉寺など歴史的な場所を訪れる。旭滝にはバリアフリーがあり、足が良くない方でも滝の近くに行き滝を眺めることができる。帰りには瓜生野公園で休憩することができる。事前に場所の情報を調べるのではなく、実際に訪れ、自分の感覚を大切にすることでその場所の魅力を発見するコースである。

以上の三つが実際にサイクリングを行い、考案された。調査では「今ここ」というフレーズが印象的であった。現在のツアー実態はデジタルデバイスにより、目的の場所に訪れる前にその場所のことを知ってしまい、ガイドブックの確認のような形になってしまう。そのようなことをふまえ、このツアーのコース紹介では最低限の情報を提供するだけで、参加者の現地における発見を大切にすることを想定している。

(4) 今後の改善点や対策

今回考案した三つのコースはあくまでモデルコースという形で提案する。旅行会社の方によると、パッケージ化することやターゲットを絞りすぎることはいらないほうがいいとのことであった。また、このツアーが天候に左右されるものであるという課題があり、雨天時の対策などが盛り込まれていないというのが現状である。

5 地域への提言

今回、伊豆市の観光資源有効活用に向けた提案として、サイクリングコースを作成した。調査の結果、それぞれの観光資源の魅力を確認することができた。今回考案しているサイクリング要素を盛り込んだデジタル・デトックスツアーにおいては調査の中で得られた「今ここ」というフレーズを参考に、スマートフォンなどのデジタルデバイスのレンズを通してではなく、自分自身の目で、目の前のものを見て聴くということに重点を置いている。

隠れている観光資源の活性化を目指すことは人を多く呼び込むことができればよいということではないと考える。修善寺の住職の方や現地の方が口にしてきた、京都のように、過剰に観光開発されたくないという思いに着目し、訪れた場所で観光客に長く滞在してもらうことで、本当の意味でその場所の魅力を確認できると考えた。そのためにもツアーの価格を高め設定し、客数を抑えたほうがいいのではないかと考える。事前に現地における情報は多く与えずに、訪れる人一人ひとりの感覚でその場所の魅力を確認することが大切である。また、自然あふれる観光資源や日本文化の和の雰囲気が漂うような場所では、人が少ないからこそ音や風景の良さが存分に際立つのではないかと考えた。

デジタル・デトックスツアーを伊豆市の観光資源の魅力に結びあわせていくことで、ツアーの参加者のニーズと観光資源の魅力を伝えたいという地元の方の思いの両方を叶えることができるのではないかと考える。

6 地域からの評価

本成果報告書を、伊豆市役所観光商工課の担当者に確認してもらい、フィードバックをいただいた。同課からの評価結果は以下の通りである。

- ・デジタルデトックスと自転車は非常に相性が良く興味深い提案だった。
- ・課題と感じたのは、やはり雨天時の対策だった。自転車を利用したツアーであるため天候に左右されやすいことが大きなハードルになる。
- ・モデルコースにする場合、デジタルデトックスの概念をどう広めるかが課題となる。まだ観光客にも馴染みのない概念であり、紹介しても単にサイクリングコースの紹介で終わる危険がある。このためデジタルデトックスの目的や効果はPRしていく必要がある。
- ・修善寺地区は自転車での周遊が比較的容易であり、寺社や自然資源など日常から離れた空間を楽しむことができるため、デジタルデバイスを介さず、「目で見て楽しむ」ことができるという点でデジタルデトックスの目的達成につなげることができると思う。
- ・デジタルデトックスという新しい概念と既存の観光資源を組み合わせることで、各公園に新たな需要を創出し、施設の有効利用につなげられるのではないかと感じた。